

之れと同様、英國の國民は、國民的自覺、
 共存的自覺、是等の自覺、口にのみ
 あらう、その實行を以て事難に當るで
 ける日本、果して國民の一切、上下貴賤
 男女老若、起つて事に當るや否や、敢て
 資本主の妻女、貴公子連の夫人令嬢に同
 はんとす

自己主義を戒む

澁谷組合 原 常 廣

現在の社會に於て、自己主義は、産業界
 に毒を流すものはあるまい、盜賊の罪
 惡は社會一般に及ばざれども、蔓延性を
 有する自己主義の罪惡は、一般の上に傳
 染化して、國家社會に及ぶ實に大なりと
 す、
 極端なる自己主義は、自己の慾望の爲め
 社會の公徳を犠牲に供して、自からは
 更に顧みず、自己慾望に囚はれて、社
 會に毒を流すの罪惡たることを知らず
 公然彼等は極端に之を發揮しつゝあるこ
 と遺憾に堪へざるなり
 自己主義の根源は個人主義より發す、個
 人主義は自尊心、自衛心は自信力を強か
 らしむ、凡てに於て自尊は必要なれども

其の化は、
 重んじて社會を
 た社會を以て
 血を呑むるを
 安樂なれば人
 らず、蓋し個
 と爲すて自己
 而して自己主
 夫れが亦た資
 以上に於て至
 一致した

勝手な祖國

モントは云ふた「労働者には祖國無し、世界の勞
 働者よ、世界的に一致せよ、汝等には祖國も無く
 國家も無し」と、然るに大衆に達して多くの
 労働者は競争に持ち出すべく、シヤイテムは國
 際に際して國內に宣して曰ふた「汝等労働者よ、
 汝等は強く祖國の爲めに死せよ」と、而して同
 乙の労働者は遂に祖國の爲に兵隊を執ることに
 一致した

ある、資本家中に於ても自己の事業が社
 會的に存在することを理得して、公徳の
 上に大に努力する人もある、けれども多
 くの資本家は決してそんな美徳を有して
 居ない
 抑も社會は共同生活である、共同生活は
 互の同情を必要とす、共同生活に温き互
 助の徳が無かつたならば、社會は體的生
 存場である、自己のみの生存を主とし、

血もなく、涙もなく、自己慾望の爲めに
 は、どんなに人の膏血を絞つても、飢へ
 て死する人の食物でも奪ふと云ふやうな
 資本主が多くて、共同生活の社會をや
 うして進歩發達せしむることが出来やう
 か、美酒と美女に酔ふ資本主の前に、國
 家とか社會とか云ふ下物は苦くて鬼も
 食はれまいと思はれる、彼等は個人の本
 能を満さんが爲めには、法律も道徳も死
 んど無視し、又た利の爲めには法律や道
 徳を極端に主張す、其自分勝手たる言語
 に堪へておる、此の自己主義個人思想が
 今日如く資本主に蔓延せんか、遂に社
 會の美望を越過して社會怨味の的と爲り
 階級的争闘の血を見るやうに爲る、實に
 個人本意の極致は悲惨なる國家の破壞で
 我等が生存する社會の罪惡を犯らばな
 らぬ

個人は社會を離れて生存なし、之れと同
 時に社會は個人を離れて存在なし、此の
 社會的生存は互諒の道に於て進み行くも
 のなりとの理を十分に理解し、互に協調
 し和合し、資本主義は在來の迷途より覺め
 労働者は資本敵意の惡思想を離れ、眞に
 同情一體の幸福を享けて、此の社會に共
 同進歩せんことを企望して止まない精神
 である

因果率より觀たる資本労働

本組合員 工學士 司 城 正 木

本編は日本労働組合連合会が労働問題に關す
 る意見を立論を以て編纂したるものなり。斯
 道研究の中心點を天地の公道に基く科學的眞理な
 り。古今東西に通じて恃らざる常法なり。
 予は茲に予の宿論である電氣生活主義よ
 りして資本と労働とは相連鎖し因果の法
 則に因つて支配せられて居ることを論じ
 て見たいと思ふ。
 世人動もすれば資本なるものは労働を使
 役する原動力にして資本は王侯の如く勞
 働は奴隸たるが如き意見を抱いて居る様
 な口物を往々相當の地位あり權威ある人
 より聴くが辭坐觀察し眞如の心鏡に照し
 て見れば労働は資本と其對極點に於て同
 一要素より成立つたもので換言すれば流
 を拘んで源を討ゆれば同一源點より出發
 して資本となり労働となりといふ眞理を
 知つて諒らざるか兎角思量分別が那邊に
 及ばぬものが往々あるやうに思はれる。
 斯くの如く世人が労働と資本とを懸け
 離れて考へるが故に労働運動(Labor movement)
 (Landschaps)が起るものである。仍て又
 労働不安(Labor unrest)が生ずる。又

協調は焦眉の急務也などの意見で勞資協
 調會なるものが起る。是等の事象轉變の
 情勢は單に眼前に現はれた勞資其物の現
 象差異に捉はれた幻影であつて勞資同祖
 の眞理を捉らへたものではないと思ふ。
 假りに茲に畫家があつて一軸の繪畫を描
 くと思つて見給へ、筆紙繪具等は同一の
 ものを使つた所で紙上の彩管動くに任せ
 其所に千差萬別の繪畫が出来上るもので
 ある。或は君子の好配たるべき勁腕たる
 淑女の美人畫も出来れば兩相相戦の兵機
 戰鬪玄々之の妙形勝伯仲の概ある武者繪も
 出来る。又は虎嘯ひて風生じ龍起つて雲
 を呼ぶ底の活畫も出来れば山紫水明の山
 水畫も出来るのである。材料は縱令同じ
 ものとした所で之れを用ゆる所の結果は
 雲泥懸隔の差を生ずるのである。唯眼前
 に現る現象したるものを瞥見して是非曲
 直を論ずるが如きは未だ其の眞理に到着
 せざるが爲めであるまいか、予は勞資
 同祖の本源を徹積分學の見地より説明を
 試みたいと思ふ。
 茲に一人の労働者があるとする。其の勞

働者が社會奉仕は直接たる間接たるを問
 はす兎に角労働の結果其の労働價値のイ
 ククブアレント(Equivalent)即ち等價と
 して勞價即ち金錢を得、而して彼の生活
 を保證する、然る場合に入るを計つて出
 づるを制し「衣食住」通して四元の生活
 基本を身分相應に克己的に享受する、假
 に三十圓の月給を得るものとして二十圓
 (天保錢主義の生活法を行ふもの)と假定
 す。を生活上實際の消費に充當し六圓を
 貯金する(是れ二割絕對貯金の方針とし
 し)さうして此六圓は月々積み立て労働
 減損積立金とも謂ふべきデブレンシオン
 ヨン(Depreciation)たらしめ彼が將來
 の生活保證の資として貯蓄し鑑一文と雖
 も現在生活のために消費しななんだらば
 此際に於て彼は一見零碎たりと雖も既に
 六圓なる資本を一月月に生んで居る譯柄
 である。斯の如く年々積り積つたなら
 ば假に三ヶ年の年數を経たとして年利僅
 かに五厘の息を以てするも八百七十四圓
 九十八錢といふ相當の高はつた資本を生
 むのである。現代の新經營會社の株券
 らば七十株(十二圓五十錢)拂込額一
 百五十圓)の持主として群小資本家の末
 を汚すに足るのである。